



公益財団法人

国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM

国際文化フォーラム通信

2011年10月

no. 92

ことばは 人をつなぐ

●2006年からTJFが現場の先生とともに取り組んできた高校の中国語と韓国語の「学習のめやす」がいよいよ完成します。ことばの学びを通じて、他者の発見、自己

の発見、つながりの実現をめざしています。

●新たなことばを学ぶことでさまざまなことを発見し、人と出会い、つながります。人をつなぐための外国語の学びはどうあるべきなのか、授業をどう変えていったらいいのか、考え方と手がかりを紹介します。



【特集】

ことばは人をつなぐ……2

- 外国語の授業を変える3×3+3
- 学習活動に3×3+3を取り入れるには？
- プロジェクト型学習の進め方
- 3×3+3を取り入れた例を紹介

TJFニュース……10

- 互いのことばを学ぶ
日中高校生のサマーキャンプ
- 2011年高等学校中国語韓国語教師研修
外国語教育関係者を
対象とするシンポジウム
- 中国語教師のための長春研修
- 日本語を学ぶ生徒と日本語教師のための
「好朋友ウェブサイト」……ほか

お知らせ……16

「学習のめやす」がめざす 3領域×3能力+3連繋

特集「ことばは人をつなぐ」

国境を超えた人の移動がますます活発化し、日本で暮らす外国人の数はこの10年間で1.4倍になりました。国や地域数は180を超え、職場、学校、地域コミュニティなど、日々の暮らしのなかで、多様なことばや文化的背景をもつ人びとと共に生きることは珍しいことではなくなりました。3月11日に発生した東日本大震災のニュースは瞬間に遠く離れた場所にいる人びとにも届きました。テレビやラジオ、新聞などのメディアだけではなく、FacebookやTwitterを通じて情報が世界を駆け巡りました。情報通信技術の進歩と情報網の発達によって、いまや日常的に個人が世界中の人とコミュニケーションしているのです。

ことばや文化的背景が異なる人たちと関わるなかで、無用な摩擦や緊張が生じることがあります。緊張を解き、互いに理解し、共有の価値観を模索するためには、これまで以上にことばで正確に伝えあう必要があるとTJFは考えています。「高等学校における中国語と韓国語の学習のめやす」作成プロジェクトに取り組むことは、高校の中国語教育と韓国語教育だけでなく、外国語を学ぶことそのものの意義、現在の社会状況を踏まえたコミュニケーション能力、そしてその能力の獲得をめざした外国語教育の目標や内容、方法について見つめなおすことでもありました。

5年の歳月をかけたプロジェクトは、いよいよ成果発表の時を迎えます。今年度内に公表される『学習のめやす2011—高校からの中国語・韓国語—』(以下、「学習のめやす」)は、「コミュニケーションのための外国語」と「21世紀に求められる人づくり」をめざした外国語教育の理念・目標・内容・方法を提案するものです。

「学習のめやす」の理念と目標

教育理念	他者の発見・自己の発見・つながりの実現
教育目標	ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てる
学習目標	総合的コミュニケーション能力の獲得 = 3領域×3能力+3連繋 3領域: 言語・文化・グローバル社会 3能力: わかる・できる・つながる 3連繋: 学習者・他教科・教室外

3領域×3能力+3連繋とは?

「学習のめやす」では、「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」を教育理念として掲げています。また、多様なことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀のグローバル社会を生きる力を育てることを教育目標としました。外国語教育を通じて、学習した言語を運用するだけでなく、他者に対する寛容性・共感性・尊重の念、内省・自尊感情・自主性・自律性、他者との関係や新たな社会づくりに必要な創造性・柔軟性・責任感を養うこともできると考えています。

これらの教育理念と教育目標をふまえて、総合的コミュニケーション能力の獲得を学習目標におきました。この能力は、多言語多文化が共生するグローバル社会づくりに参画し、自律的に生きるために必要な力であり、「言語」「文化」「グローバル社会」の三つの領域で構成されるものです。そして、各領域において身につけたい能力を「わかる」「できる」「つながる」に分けて示しています。「わかる」は知識・理解目標、「できる」は技能目標(思考・判断、技能・表現を含む)、「つながる」は関係性構築目標として位置づけています。

さらに、三つの領域、三つの能力を強化するものとして、三つの連繋も目標としています。まず一つめは、授業の中心に学習者をおき、学習者の関心・意欲・態度や学習スタイルにつなげることです。こうすることで学習者は主体的、能動的に学習を行えるようになります。学習ストラテジーを身につけ、生涯にわたって自律的に学習を継続できる土台を作ることができるのです。

二つめは、授業で取り上げる内容を、学習者がこれまで学習したことや経験したこと、他教科で現在学習している内容とつなげることです。これによって学習効果が高まり、外国語学習の内容が豊かになります。

三つめは、教室外の人、モノ(レリア・生教材など)、情報を積極的に教室に持ち込んだり、また教室外にでかけていったりして、学習を現実社会とつなげることです。これによって学習がリアルになります。

これら三つの領域における三つの能力と三つの連繋が、「めやす」のキーコンセプト3×3+3(スリー・バイ・スリー・プラス・スリー)となっています。これをまとめたのが、p.3の[表1]です。この3×3はどれから始めてもよく、どこから身につけていってもよいものです。

[表1] 3領域×3能力+3連繋

領域 能力	言語	文化	グローバル社会
わかる	<p>A. 自他の言語がわかる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 学習対象言語の文字・音声・語彙・表現(文法・語法)について知り、その仕組みを理解する。 ▶ 学習対象言語について新たな発見をしたり、母語と比較してその違いに気づいたりする。 	<p>D. 自他の文化がわかる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 学習対象文化に関して表象するさまざまな文化事象(事物や行動)について知り理解する。 ▶ 学習対象の文化事象を観察して新たな発見をしたり、自文化や自分が知っている文化と比較して、その違いや関係性に気づいたり、推測したりする。 	<p>G. グローバル社会の特徴や課題がわかる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ グローバル社会(自分-学校-身近な地域社会-日本社会-広域地域社会-世界が緊密につながる21世紀の多言語多文化社会)の一員としての自覚をもち、グローバル社会の特徴や直面する課題について理解する。 ▶ グローバル社会に生きるために、21世紀スキルを身につけることが必要であることを理解する。
できる	<p>B. 学習対象言語を運用できる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 学習対象言語を使って、身近な事柄や関心のある事柄について、自分の気持ちや考え、情報を伝えたり、相手の気持ちや考え、情報を理解したり、相手とやりとりをして運用することができる。 ▶ 学習対象言語と母語を比較して、その共通性や相違性、関係性を探究して分析することができる。 ▶ 言語的能力のギャップを埋めて、コミュニケーションを成立させるために、さまざまな言語および非言語ストラテジーを使うことができる。 	<p>E. 多様な文化を運用できる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 学習対象文化と自文化をはじめ、多様な文化事象を比較して、知識情報を活用しながら、共通性や相違性を分析することができる。 ▶ 文化事象間の共通性や相違性の事由および文化事象の背景にある考え方や価値観などについて探究して調べ、自分なりの考えをまとめて表明することができる。 ▶ 文化事象を分析することを通して、文化の多様性や可変性といった文化をみる視点を身につけ、自文化を再認識したり、他の文化事象についてそれを適用したりすることができる。 ▶ 自他の文化をはじめ、異文化間の相違性から生じる誤解や摩擦、緊張関係を調整したり、妥協点を探ったりして、協力して問題を解決することができる。 	<p>H. 21世紀スキルを運用できる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ さまざまな文化的背景をもつグループの一員として、メンバーと意見を交換したり、グループ全体の目標を達成するために、自分の役割を責任をもって果たすことができる。(協働) ▶ 問題を解決するために、資料、状況を客観的に解釈・分析・吟味して判断し、自らの考えを根拠に基づいて表明することができる。(高度思考) ▶ 情報を収集・編集・発信する際に、情報・メディア・テクノロジー(ICT)の特性をいかして、相互作用的に活用することができる。(情報活用)
つながる	<p>C. 学習対象言語を使って他者とつながる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 学習対象言語や母語を使って、主体的かつ積極的に他者と対話をして、相互作用しながら共に関係をつくり上げていくことができる。 	<p>F. 多様な文化的背景をもつ人とつながる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 多様な文化的背景をもつ人びとと主体的かつ積極的に関わり、相互に作用しながら、軋轢や摩擦を乗り越えてつきあうことができる。 	<p>I. グローバル社会とつながる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 人・モノ・情報にアクセスして、自分とつながりのあるグローバル社会のネットワークに関わり、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動することができる。



関心・意欲・態度／学習スタイルとつながる

連繋 既習内容・経験／他教科の内容とつながる

教室外の人・モノ・情報とつながる

言語領域のわかる・できる・つながる

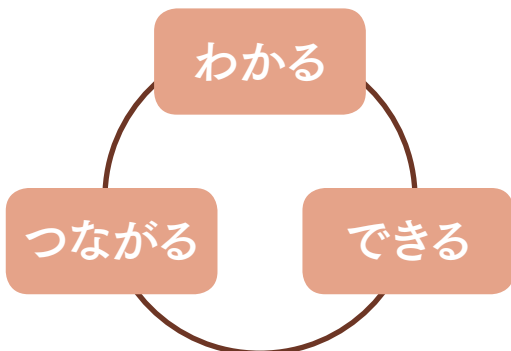
これまでの授業では、教科書に沿って授業を進め、そこに提示されている文字、音声、語彙、表現(文法や語法)といったことばの仕組みや形式を学習者が理解し覚えることを目標とする場合が多かったのではないのでしょうか。これは、「言語領域」の「わかる」にあたります。しかし、最近はコミュニケーション志向のアプローチが注目を集め、文法中心の教育から実際にことばを運用できるようにする外国語教育、つまり、「できる」を重視した取り組みが始まっています。ただ、どのような話題について、何ができるようになることを目標とするのか、という具体的な学習到達目標の設定が課題となっていました。

そこで「学習のめやす」では、まず、高校生が興味、関心をもつ話題や発達年齢にあった話題、生徒の視野を広げる話題など15の話題分野*を設定しました。そして、話題分野ごとに四つの言語レベルを設け、それぞれのレベルでの到達目標を、「～ができるようになる」というcan-do-statements(能力記述文)で提示し、指標化しました。これが、コミュニケーション能力指標です。例えば、「自分と身近な人びと」のレベル1では「名前(姓名)や属性(高校生、学年、年齢、誕生日など)を言ったり尋ねたりできる」、「日常生活」のレベル1では「一日の生活の基本的なあいさつができる」、「買い物」のレベル2では、「ほしいものの商品の数、サイズ、色などを伝えることができる」などです。

また、外国語を学んで自言語を客観的に見られるようになることも外国語学習の目標の一つです。自他の言語を比較対照し、その異同を分析して両者の関係を探ることによってことばに対する理解が深まり、感性が磨かれます。

さらに、「学習のめやす」では、「つながる」ことも目標として掲げました。学習者が習得したことばを使って、母語話者やクラスメイトなど他者と実際に交流したり、対話したりすることで、互いの考え、気持ちや心を通わせ、他者と「つながる」ことが外国語を学ぶうえで大切であると考えます。わずかな言語知識と運用能力しかなく

【図1】



でも、「つながる」ことは可能です。むしろ、学習時間数が限られている場合にこそ、文法に終始しないように、「つながる」ための学習を積極的に取り入れることが大切だと考えます。

「わかる」「できる」「つながる」がそれぞれ、相互に作用しながら学習は深まっていくと考えています【図1】。

*自分と身近な人びと、学校生活、日常生活、趣味と遊び、買い物、食生活、地域社会と世界、自然環境、からだと健康、衣とファッション、住まい、交通と旅行、人とのつきあい、行事、ことば

文化領域のわかる・できる・つながる

これまでの外国語の授業では、文化は知識として得たり、理解したりする対象として取り上げられることが多かったと思います(「わかる」)。しかし、「学習のめやす」では、学習対象とする文化を自文化と比較対照して、分析の方法や視点を獲得することによって、異文化間を調整する力(「できる」)を身につけ、多様な文化的背景をもつ他者の立場や文化に配慮しながら、友好な関係を構築することを目標としています(「つながる」)。

そのため、「学習のめやす」では、言語に直接結びついている文化と、言語の背景にある文化(人間の生活のシステムを意味する広義の文化)の両方を取り上げ、事物や行動といった目に見える文化事象を数多く例示しながら、その背景にある価値観、考え方、感じ方などを探究する視点をもつよう提案しています。

グローバル社会領域のわかる・できる・つながる

外国語学習者は、21世紀のグローバル社会の一員としての自覚をもち、その特徴や直面する課題について理解を深め、グローバル社会を生きるための21世紀スキルを身につけることが必要です。「学習のめやす」では、時代が要請する数多くの21世紀スキルのなかから、多言語多文化が共生するグローバル社会づくりに参画するために必要なスキルとして、協働力、高度思考力、情報活用力(情報リテラシー、メディアリテラシー、ITスキル)に焦点をあてています。これらのスキルは、言語および文化領域の「できる」力を支えるものでもありません。外国語の授業のなかでもこうしたスキルを身につけ、それらを活用して母語話者やグローバル社会とつながることが重要だと考えます。

❖ 3領域×3能力+3連繋を含む「学習のめやす」の骨子を説明した「学習のめやす2011」ダイジェスト版を9月に発行しました。このPDFは、ウェブサイトでご覧いただけます。

www.tjf.or.jp/ringo/pics/meyasu2011d.pdf

3×3+3とプロジェクト型学習活動

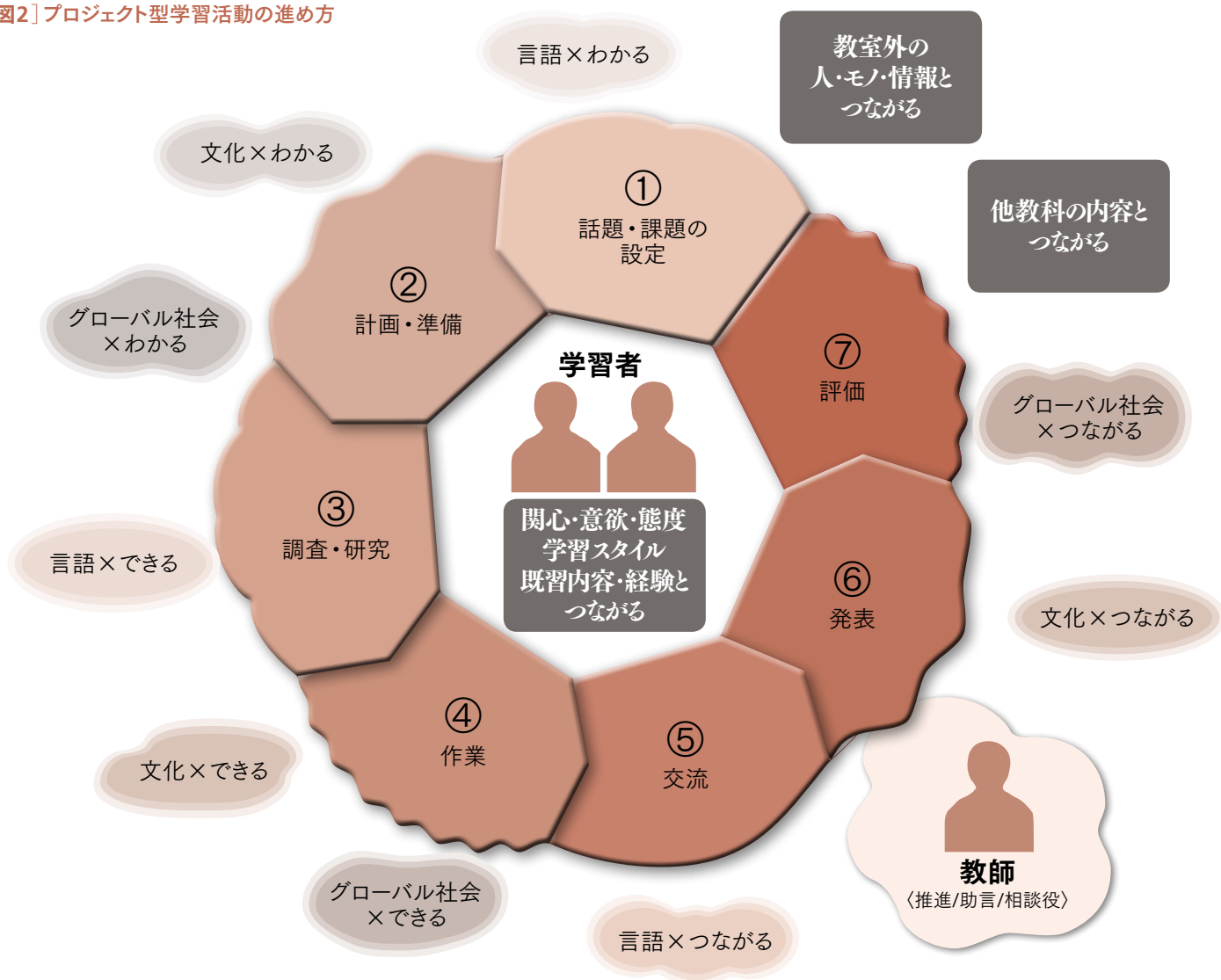
実際の学習活動に3×3+3をどのように取り入れることができるのでしょうか。教育環境、教育条件に応じてさまざまな取り入れ方があります。「つながる」から入る活動も可能であれば、「わかる」から始めて、「できる」「つながる」に進んでいく活動の流れも可能です。「文化」の学習を中心にしたものも可能であれば、「言語」を中心にして「文化」「グローバル社会」の内容を取り入れていく活動も可能です。学習者の能力、興味、資質などを考慮して、与えられた条件下でいちばんいい方法を教師は考えていく必要があります。

語彙や表現を理解する(言語領域の「わかる」)ことは言語のクラスの重要な目標ですが、それだけでは、言語を運用したり(「できる」)、言語を使って他者との関係を構築する(「つながる」)ことはできません。

「できる」と「つながる」の能力を身につけるために、実際のコミュニケーションの場面に近い状況を教室に作り出し、学習活動を行うことが有効です。その効果的な方法の一つがプロジェクト型学習活動です[図2]。

プロジェクト型学習活動は、現実の社会活動をクラスに持ち込み、自ら問題を発見し、仲間とその問題を解決して有意義な目標を達成する活動です。例えば、取り上げられるテーマとして、学習者にとって身近で関心のある話題や21世紀のグローバル社会に関する重要な課題(環境問題や高齢化社会、少子化、ボーダーレス経済など)があります。学習者は、これらの事柄について調べて課題を設定し、その課題に向けていろいろな活動を行いながら、考えを深めていきます。

【図2】プロジェクト型学習活動の進め方



プロジェクト型学習では、活動の内容によって、個人でやることもあればペアやグループになって取り組むこともあります。個人、ペア、グループでの活動を組み合わせたり、使い分けたりすることで、さまざまな学習スタイルや学習者のタイプに対応することができます。グループ作業では、言語領域の能力をまだ十分に身につけていない学習者が、言語能力を身につけた学習者に助けられる一方で、別なことで強みを発揮できる機会を作り出すこともできます。ペア作業やグループ作業では、異なる意見や価値観をもつメンバーの考えや主張を聞いたり、自分の意見を表明したりして、全体をまとめていくなかで協働力が育っていきます。さらに、グループ内での自分の仕事を責任をもって時間内に仕上げようとするなど自律性も育まれます。

プロジェクトを企画し、段取りを考えたり、交渉したり、自分の意見を論理的に述べたりすることが、**高度の思考力**を使うことを促します。活動のために情報を収集、整理し、それをどのように提示するかなどを考える機会が豊富にあり、情報や**テクノロジー**のリテラシーを育む環境を提供します。プロジェクトの結果をいろいろな形で発表することで**プレゼンテーション能力**や**メディアリテラシー**も身につきます。

学習とは教師から学習者に知識が移動し、学習者がその知識をそのまま受容するプロセスではありません。学習は学習者の脳で行われます。最近の脳の研究によって、学習がどのように行われるかが明らかになり、それに基づいて効果的な学習方法がいろいろ提案されていますが、いずれも学習者が主体的、能動的に学習することを勧めています。他人に教えられるのではなく、自分で経験し、学習すべきことを発見し、積極的に学習に関与することが学習効果を高めます。その際、学習者が自ら学習を進められるように、教師は助言をしたり相談を受けたりするサポーターの役割を果たします。

また、学習者は自分に関連した、意味のある内容で言語を学習したほうが、言語そのものの学習を目的とするよりも効果的に言語を習得できることが実証されています。関心をもつ内容や意味のある内容を学習するなかで自然に語彙・表現を習得していくことが必要なのです。またそうすることによって、外国語教育の学習内容を豊かにすることができます。

プロジェクト型学習は、こうした**学習者中心**、**活動中心**、**内容重視**の考え方を自然に取り入れることができるといえます。

実際の学習活動を考える

カリキュラムを作るときに取り入れたい方法があります。それはバックワードデザインです。これは、ゴールや目標をまず見据えてから、評価、学習活動、学習内容という順番でカリキュラムをデザインする方法です。

従来のカリキュラム作りは、文法・語彙、文化項目など、教える学習内容を決めることから出発していました。しかし、カリキュラムを終えたとき、学習者は何ができるようになっていくかという学習目標を設定することから出発することが大切です。

明確かつ達成可能な学習目標を立てたら、次に目標をどれだけ到達できたのかを測る「全体評価」を作成します。全体評価はカリキュラムの最後に行うものですが、あらかじめ作っておくことが大切です。そして、学習者が全体評価でいい成績をとるための授業の内容や方法を考えます。どういった学習活動をするのか、その活動でどんな内容を扱うのかを決めるのです。さらに、学習者の理解度や定着度を測るためにカリキュラムの途中で行う「学習を助けるための評価」を作成します。この評価によって、学習者の長所、短所などを適切にフィードバックすることで、効果的な学習ができるようになります。学習への意欲を高めることもできるのです。

バックワードデザインでは、「全体評価」や「学習を助けるための評価」の仕方と内容を事前に学習者に伝えておくことが重要です。目標とその評価法を知っている場合とそうでない場合とでは、学習効果に大きな違いが出ます。

また、評価というと、これまでは教師が行うものがほとんどでしたが、学習者が自分の学習状況や学習成果を内省、自己評価することも取り入れると、自分の学習に責任をもち、自律的に学習を進める力を伸ばすことができます。

プロジェクト学習活動においてもバックワードデザインを取り入れることが必要です。次に、2011年夏の教師研修(p12参照)の後半に行ったテキストブックアダプテーションのグループワークで、韓国語のあるグループが作成した単元案を紹介します。これはプロジェクト型学習活動の一例でもあり、バックワードデザインで作られたものです。

❖注：バックワードデザインを含め、コミュニケーション能力を養成するための授業の作り方や、語彙・表現の効果的な導入方法については、『国際文化フォーラム通信』第89号(2011年1月発行)の特集に詳しいので、ぜひご参照ください。

- **単元名**：在日韓国人の老人ホームで入居者と交流しよう
- **単元目標**：地域にある在日韓国人の老人ホームを訪問し、韓国語であいさつをして古今の韓国の歌を歌い、入居者の方々と自己紹介をしながら交流することができる。
- **言語レベル**：学習1年目。週に2時間。
- **話題分野**：自分と身近な人びと、趣味と遊び、人とのつきあい、ことば
- **教科書**：『新チャレンジ韓国語』（第7課終了時）

プロジェクト型学習の進め方

①話題・課題の設定

学習者が自分にとって身近に関心のある事柄や21世紀のグローバル社会にとって重要な話題や課題などを決める。

②計画・準備

プロジェクトの概要を計画し、設定した話題・課題の内容について話したり、書いたり、議論したりするために必要な語彙、表現を習得・復習したりするほか、必要な文化知識、背景知識を確認してプロジェクトの準備をする。

③調査・研究

学習対象言語や母語を使ってインターネットや書籍などを使って情報を収集・調査し、問題解決のための分析、評価をするなかで、高度思考力や情報活用力を身につけることができる。

④作業

プロジェクトの最終段階の活動(例えば交流)のための準備を続ける。
ペア、グループ活動を行い、異なる意見を調整するなかで協働力を身につけることができる。

⑤交流／社会に貢献する活動

学習している言語を使ってさまざまな背景をもつ人びとと交流したり、話題・課題について意見を交換したりする。教室外の人・モノ・情報と接することにより、さまざまな文化について知り、多文化的背景をもつ人とつきあう能力が養われる。

⑥発表

交流中、あるいは交流後の報告として、テクノロジーを使ってプレゼンテーションを行い、情報、テクノロジー、メディアのリテラシーを身につけることができる。

⑦評価

教師が活動デザインの際にあらかじめ作っておいた評価を実施し、プロジェクトの目標の達成度を評価する。また、自己評価、グループ評価によって、学習者は、自律性、協働力などを内省、評価する。

学習活動の流れ

①韓国の音楽(K-POPと昔の歌)、地域社会の在日韓国人、在日韓国人の老人ホームをテーマにすることに決定する。

②在日韓国人の老人ホーム「故郷の家」を訪問し、これまで学習した韓国語や好きな韓国の歌の発表も兼ねて、入居者と交流するという計画を立てる。グループになって、司会や挨拶、自分たちのことや好きな歌を紹介するシナリオ、交流に必要な表現を洗い出す。それを韓国語でどう言うのか、学習を終えた教科書第7課までの内容から見つけ出し復習する。地域にある在日韓国人の老人ホーム、日韓の歌の特徴、在日の高齢者が好きな韓国の歌(時代差、世代差)など調べる内容を整理する。

③グループでネットや図書館で韓国で流行しているK-POPと、入居者が若い頃流行していた歌を調べ、実際に聴いて、歌詞の意味や特徴を理解するとともに、日本の古今の歌と比較してみる。また、韓国の服装についても調べ、当日の衣装を決める。在日韓国人一世のことや、一世の暮らしとそれを支える人びとについて学習を深め、視野を広げる。「故郷の家」の設立経緯、入居者の状況、日々の様子などについても調べる。

④クラス全体で歌う自分たちが好きな歌と老人ホームで喜んでもらえそうな歌、各1曲を決め、暗誦して歌う練習をする。自己紹介や入居者と交流するときに話したい内容を考え、先生の助けも借りながら、グループメンバーで助けあって韓国語のシナリオを作成する。役割(ダンス係、衣装係、演出係、進行係など)を分担して、出し物を練習した後、他クラスの生徒や先生に観客になってもらいリハーサルを行う。生徒たちもビデオに撮ったものを確認しながら、改善点などを話しあう。

⑤訪問当日：職員から、ホーム建設までの経緯や入居者の普段の生活の様子などについて聞く。後日、報告、発表するための資料ももらっておく。入居者と面会し、司会が全体のあいさつをしてから、準備してきた歌の発表会を行う。発表会が終わった後、おやつタイムの手伝いをしたり、個別に自己紹介をしたりしながら入居者と交流する。交流後は入居者とお別れのあいさつをする。

⑥訪問後には、ホームで出会った方々に韓国語で感謝のカードを書いて送る。
まとめと発表：日本語で感想文を書き、学校のホームページ用にも自分たちの感想を記した訪問記の原稿を作成して、学校内や地域の人たちに伝える。

⑦それぞれの領域での評価を行う。

言語領域：歌のテスト、リハーサルと本番のできばえ、文集、ホームページ用原稿の内容。韓国語がレベルアップしたり学習意欲が高まったりしたか。

文化領域：交流相手と関係が構築できたか。日韓・世代間の歌の比較ができたか。

グローバル社会領域：クラスメイトとのグループ作業で協働できたか。地域社会とつながったか。在日韓国人の問題について理解が深まったか。

資質：視野が広がったり考えが深まったりしたか。

p.7で紹介した「在日韓国人の老人ホームで入居者と交流しよう」のそれぞれの学習活動の目標を3×3+3の表(p.3)にあてはめると次のようになります。

領域能力	言語	文化	グローバル社会
わかる	<ul style="list-style-type: none"> 以下の事柄に関連する必要な語彙や表現を理解する。 自己紹介に必要な語彙・表現 好きなことの言い方 感想の述べ方 あいさつやお礼のことば 聞き返す表現 韓国の歌の歌詞やキーワード 	<ul style="list-style-type: none"> 韓国の現代と昔の歌を調べたり聴いたりして、その特徴を理解する。 在日韓国人の老人ホームについて調べたことや施設の職員の説明を聞いて、建設までの経緯や入居者の様子を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 在日韓国人の歴史的背景について理解を深め、地域に在日韓国人のための老人ホームがあることを知り、在日一世と彼らを支える人びとについて理解する。
できる	<ul style="list-style-type: none"> 名前や学校名、家族、年齢などを紹介する。 好きな歌や好きなこと、休日にしていること、韓国語を習っていることを伝えその感想を述べる。 あいさつをしたり、お礼のことばを述べたり、聞き返したりする。 自分たちが選んだ韓国の歌を歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> 韓国の現代と昔の歌の歌詞やメロディー、歌い方について比較し、共通点・相違点を分析する。 同時代の韓国の歌と日本の歌の共通点や相違点について、気づいたことを発表しあう。 韓国の服装(現代風、民族衣装)について調べ、歌やダンスの発表にふさわしい服装について話しあう。 	<ul style="list-style-type: none"> 日韓の歌や在日韓国人一世の生活について、ネットや図書館で調べたことを分析し、まとめる。(情報活用) 在日韓国人の老人ホームで歌うのにふさわしい昔の歌と、自分たちが紹介したい現代の歌をグループで話しあって決める。(協働、高度思考) 発表に向けての係分担を決め、企画・練習し、発表する。(協働、高度思考)
つながる	<ul style="list-style-type: none"> 在日韓国人の老人ホームを訪問し、韓国語を使って入居者の方々と積極的に対話し交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> 在日韓国人の老人ホームを訪問し、韓国の歌やダンスなどを通して、世代と文化的・歴史的背景の異なる在日一世の方々と交流し、相互理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> 在日韓国人の老人ホームの訪問、入居者交流を通して学んだことを文集やホームページで発表し、クラスメイトや家族、地域に伝えていく。



連繫	関心・意欲・態度／ 学習スタイルとつながる	好きな歌や音楽を通して学習を深める。 歌やダンス、司会、IT操作などそれぞれの得意な分野をいかして学習を深める。
	既習の内容・経験／ 他教科の内容とつながる	第7課までの語彙や文法 地理、歴史
	教室外の人・モノ・ 情報とつながる	在日韓国人の老人ホーム「故郷の家」を訪問し、そこに暮らす人たちと交流する。 韓国の歌に関するウェブサイトを検索する。

❖この単元案は、韓国語のグループがそれまでに学習したことのまとめの活動として、実際に使っている教科書をベースに「学習のめやす」の考え方を取り入れ作成したものです。TJFが一部編集し掲載しました。

❖本特集のpp.5～6とp.7「プロジェクト学習の進め方」は、「学習のめやす作成プロジェクト」の全体監修者である當作靖彦氏(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)の執筆によるものです。

この学習活動を作ったグループでは、最初、どの生徒も関心をもつK-POPの歌を取り上げることから考え始めました。しかし、言語の「つながる」や、「文化」「グローバル社会」の領域に関しても学びの機会を作るために、在日韓国人の「故郷の家」を訪問するという活動を軸に据えることにしました。韓国語を学びはじめて1年目のクラスの生徒であっても、自己紹介やあいさつだけでなく、社会的な視点や体験を身につけさせ、潜在的な力を伸ばしたいというメンバーの思いがこの活動案につながったといえます。

3×3+3の表を横におきながら作業を進めた結果、メンバーは3×3+3がどうということなのか、理解が深まったといいます。今回の活動案は、学習のまとめとして位置づけられたプロジェクト型学習ですが、普段の授業でも3×3+3の表を参考にしながら、単元の目標を設定することによって、外国語の授業の目標を明確にすることができます。これまで焦点をあててきた、言語領域の「わかる」力に加え、3領域の他の能力も目標として取り入れやすくなります。これらの目標

を達成するために考えられた、学習者中心の活動を通じて、学習者は意味のある内容のなかで言語運用能力を高められるだけでなく、多様な能力を伸ばすことができ、最終的に学習の達成感を味わうことができるのではないのでしょうか。



学習のめやすプロジェクトの今後

本特集では、「学習のめやす」の理念と目標、目標を達成するための学習内容・学習活動例の一部を紹介しました。2012年2月に発行予定の冊子『学習のめやす2011—高校からの中国語・韓国語—』では、コミュニケーション能力指標をはじめ授業設計の詳しい方法を掲載します。ウェブサイトでは、授業設計のための材料とヒント（15話題分野別4言語レベル別表現例、話題分野別語彙例、話題別文化事象例・グローバル社会事象例、評価のためのルーブリック集、年間指導計画案、話題レベル別の単元案など）を掲載します。ウェブサイトでは、「学習のめやす」を使った教師の取り組み事例、授業に役立つ写真素材、資料等を随時追加していきます。

冊子は、中国語・韓国語教育を実施している高校の学校長、担当教師、各都道府県の教育委員会に配付するほか、中国語、韓国語に限らず広く外国語教育に関心をもつ人たちに届けたいと考えています。

そして、より多くの中国語・韓国語の教師と「学習のめやす」を共有するため、毎夏実施している5日間の研修に加え、各地で小規模のワークショップも実施していきたいと考えています。

冊子の刊行に合わせ、2012年3月3日(土)にシンポジウムを開催し、「学習のめやす」が提案する21世紀の外国語教育のあり方と、それを実現するためには何が必要かを参加者とともに考えます。言語教育関係者に限らず、行政・メディア・出版など広く関係者に協力を呼びかけ、新しい外国語教育実現に向けてのアクションプランの作成に挑戦したいと思っています。

「学習のめやす2011」作成プロジェクトメンバー(2009.3～2012.3)

- ❖ 全体監修・推進
 當作靖彦(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授/米国)、中野佳代子(TJF理事)
- ❖ 中国語部会
 植村麻紀子(神田外語大学専任講師)、胡興智(日中学院専任講師)、胡玉華(関西学院大学常勤講師)、千場由美子(大阪府立柴島高等学校教諭)、藤井達也(埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭)*、森茂岳雄(中央大学教授)、山崎直樹(関西大学教授)
- ❖ 韓国語部会
 任喜久子(大阪府立花園高等学校教諭)、釜田聡(上越教育大学教授)、金順玉(フェリス学院大学非常勤講師)、金孝卿(国際交流基金日本語国際センター専任講師)、中川正臣(元培材大学専任講師/韓国)、阪堂千津子(東京外国語大学非常勤講師)、山下誠(神奈川県立鶴見総合高等学校教諭)*
- ❖ 事務局
 水口景子(TJF事務局長)、長江春子(TJFプログラム・オフィサー)、中野敦(TJFプログラム・オフィサー)

* プロジェクトの部会リーダー
 (敬称略/五十音順)

「学習のめやす2011」作成プロジェクトは、文部科学省の委嘱を受け実施した「学習のめやす試行版」作成プロジェクト(2006.1～2007.3)を受け継いで実施されました。両プロジェクトの全メンバーはウェブサイトに掲載しています。

<http://link.tif.or.jp/meyasu2007>